



忠臣蔵編
 巻之二
 八尋三馬
 上

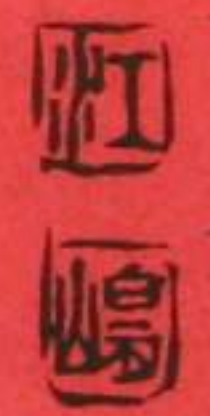
行
 入遠13
 2414
 1



忠臣減偏癡氣

論初稿

東京書賈
珍々堂梓



式亭三馬戲編

附言

眉髻道中膝愛毛と云板元が親達の厄介板元凡庫の
 業虫たるんとも或人が是を頻り頭痛に悩んで度減を
 補ひせよ出せと促せども板元痴金魂の大きき不發費救も
 如何あまざるも少く是に力を得て頃日漸く再發を
 四方小告りに幸ひ明治社聖世の腹被碎も不碎も
 雅俗を問はば宜しく家業の暇に之を見ぬへに罷後絶倒
 胸膈も自然と費きて憂病息災百葉年の以爲命も
 乞と清谷ふ板元の其効能も知りしめや世程より四方の
 の此後又遠里佳客の郵書を飛を陸後購求て止
 ざれば彼頭痛不悩一昔清好お喧古彼の標吹あつて板元

へ13
2414
1-2

大正五年五月三日
室井守藏氏贈
海書 希倉

のけの幸ふ然るに近日又此書を校華或は表飾を改め
 費賣する者甚く多し其れも皆不全板元是を河童の
 尻ちまとも思ひだ看者も亦評して曰草双紙の所産不
 賤しく活版の振向を多しと反て板元が元板の費裁裁
 増しといひ嗚呼亦何ぞ急かしく小言も其の看客諸君
 の愛顧は厚きと僅で愛に忠禮を申上り為め板元も少
 しく布袋を覺ゆれば其れも怒の皮を突張し返舎前の著
 書の固より近世有名なる武庫三馬山東系傳等の著書
 初め板元が必鹿の珍量数百巻其面向より漸次出版せんと
 欲す其れが巻末の目錄を以て笑覧の上求めしんことを
 四十五年
 壬午仲秋
 珍々堂借書屋 江島伊三郎

題卷首 

偏癡氣先生ハ何人ぞ出得田舎抄正録老翁
 俗稱石部金吉といふ。性偏屈り木ハ木金ハ金。
 理ハ理非ハ非と壓き故ハ當世の人氣不遇在朋友
 此交情を去る。宿昔青雲は棧を蹴し先祖代
 くの飯粒ハ離るる理以降。癡を惜く清貧を好
 る。躬を饒く悪態を衝き。浮世と云ふ文ハ安みて

裸むき体ていと百貫ひゃくくわんの高たかぶぶ。頃ころ日ひ志し臣しん滅めつをを雜ざ戲げと
觀かんる大おほ僕ぼくとて曰いハハ瞽こ目め萬まん又また明めい目め一いつ又またなる彼かのの
大おほ目め生せいめめの米こめ異い痴ち漢かん忙まじ々々のの言ことれれず。且かつ覺あつふと
笑わらて曰いハハ嗚な呼こ忠ちゆう臣しん醫い阪はん角かく。泥どろ中ちゆう乃すなは蓮れん沙さ中ちゆうの金かね
唐たう山さん坊ぼう豫よ讓じやう。國こく朝てうの伴ばん内ない先せん醒せう。和わ漢かん兩りゆう朝てうに
唯ただ二に個こかかるべべ。凡たゞて性せい質しつの善ぜん惡あくをいい。行かう蹟じつ此こゝ
理り非ひと明めいめ。而しか后ごチチヤヤンンヤヤと答こたへ。へへゲゲタタレレとも惡あく量りやう

づづと世よ入い評ひやう品ひんの博はくを去ことややみみのちちやの
茶ちやくくむむちちやや。蚯めい蚓ぎんも大おほ蛇だとと為な。大おほ象しやうも土ど龍りゆうと
余よ傍ぼうに在ある曰いハハ先生せんせい太た村むら學がく究きゆうなり。當たう時じ
な俗やうといいはめ。淨じやう瑠りゆう璃りも語ごるは演えん戲げも仕し
詰つめ論ろんふ息いき精せい張ちやう。吐そと耗へうをどけ損そん
多たむむばとんとんららがが子こをを指さししと鼻はな噴ふ文ぶん止と
もも偏へん痴ち氣き先せん生せい耳みみををかかけけど。拘かう欄らんのの嫌きら淨じやう

瑠璃香るりか。うけ構かまもたす。愚老ぐらうが身みか。バ思おもふ。ついで
 止やむ。腹脹はらふく。寐ねらぬ。眼鏡めがねもあけ。ふあつ
 く。書記しきき。偏癡へんち氣論きろん。定めて高論かうろんと思おもふ。外ぐわい。陰えん。鉄てつ
 論ろんの銅脈どうみく。論ろん。証據しやうこ。偏癡へんち氣きなり。り。一いち。兩りやう

文化八年辛未夏六月中浣本町延壽丹

藥店ふかい

式亭三馬戲題



こゝに紫むらさきなる人物にんぶつのへん
 ちき。偏へんの外ぐわいなり
 ちき。偏へんの外ぐわいなり
 高たかの師し直ちかき
 高たかの師し直ちかき
 高たかの師し直ちかき



今いまの人ひとよよくくべべてていいままへへととおおりりひひままいいままららくく

カネ雪もて
ふじんのみ塔
とつくるお

カネ云
「ふじんといふをばいりかとううらひも
さんといふえきさうごアアア
まがらふさん」

○カネの粗言ふさをやうあるよやく
しきりのふあらむと一十六丈
あて男のうけえ尺何寸の大
こりまゆりくりまうと
くろくそまのトおあせ
ひげのあるでくくとしと
まへぐとまうおやひのまをも
ふじもとどつてありそをせバ
まうせていおけとさてよくお似合
あうるあうなり



伴内かごのふ

伴内ハたまあてまてふいやま
あく男らうま武士なり



伴内云
「石とりごみのせておまがあらうて
ゆくもこけみさたごうらおまも
のうらまうし九たしらのれおぶ
り」をそむくでもあのうら石の
やまうりそのまう〜ハテこ〜が
まんがうご石のうへもとま
といふとがあるおまのいのが
〜のうら石の石合の金とせね
ばきがままぬそを石の石で
のせくおいて金合の金でおめこ
ま〜をぢぞいそげ〜

勘平とあつると
山ざねのあつと
うけあはするお

○勘平の圖のふくみかけの
男あつとつうのくしいと
ゆふどでいあけきど男
さきまのまゐるふくみかけの
うし拾あづめふくみかけの
こまのあつとつうの
張あつとつうの

勘平の
うまふくみかけの
あつとつうの



△たびごみよコレてめへあつとつうの
と出うけのゆあろげんのと又もみしうとまもとさげのさうり
をらつてと目つづらごけあつとつうの
中くみたねへあつとつうのあつとつうの
ゆのさきまのまゐるふくみかけの
ねへあつとつうのあつとつうの
こねつてあつとつうの
あつとつうの
まゐるふくみかけの
んあつとつうの
もあつとつうの

とみせ小娘
山科へゆく

小のこみせ

みせも

むあ

さあめ

ゆづり

ののや

さを

さ

まの

うこ

とこけとみせが娘さうり小娘こ



けあ人のよの女とあひの介さうさの命の内森中
風俗をあらわしたる風流の中づくりあてをやり
ののこ年をどおくまてのふうありとさく

五物で平生まふあひせておく

おあいのうらみぶんづらめいん
かめくくうらふしあまを
おやこあうづまの及中

まづいづのゆうこととふひつをう
波の平のあやうあまのうらまを

からあんごうこくうらぬあこじと
よこつてうふ春角ことまの
さうまのこさうふ替女
のこ

了弁をげられて
陶宅する

了弁のさちとむらむたしひのやぶふ
あつむがくゆんもあうてさちゆま
のる医者ありことまのつくと養平と
ふあてがころのゆあう

了弁
古方家ありむらむらおささ

たておろしふあさつこえん

切られあうとさあいと

いつて養平めいおれと

るげさがおさも又あめ男の

さちとあげさあめくうねの

ころらぬ甲のあめいぬちや草根本皮の

あめをさるおさくし飛後の症ちやドリヤこまうらむさめと

全人と出うけませう



かたよはせぬゆりの勘入
おんこころをせよ

かたよはせぬゆりの勘入
いかにとせよ
こころをせよ

「おのまの男をよこめおの
ふさしよめをくぐらぬの
アノゆりの命の大やが
まけとまておろし
女のふさしよめまのこま
つゆめい

「おき又らへとまのこま
せうのうおんまり用がわりのうら
らくもあつたをまじらまじと
終又まじらく又がくつあつた
あはれおんこころをせよ



平次
同十六人の流しつるまふまら切後もあだ
やうでいごおまひつるでいまうをえりし
ねくこでむらむらと切しおがかととらんら
まてつるまふと出たやうまめんどこの
ひりくひりくおつとまらへん
いやくえんておのこま
よーませうおらア
おらのまふも
死なまて
めらふおど
マかつりあのとうら
見てもぞのとほら
平次あひまをく
りてあつたお



「おんこころをせよ
おがうのくしいあろ
めのごめんごめん
せらぶくしておま
命せまちのとい
まてわるといづれ
おんこころをせよ



著者の先祖

十返舎一九著作目録

道 中 **むぎとろり毛** 本巻道中 二十五冊
奥羽道中 十五冊

大崎日づり 先づ餅枕 **滑稽二日酔** 首飾前小倉老金
全二冊

浮世 お辰流 **滑稽お辰流** 初編 各二冊
武編 二冊

馬の耳 花 **滑稽お辰流** 全二冊

東京 日本 **珍々滑稽書屋** 

忠臣藏 備癡氣論上

備癡氣先生著 式亭三馬再校

○ 足利左兵衛督直義公

今度鶴が岡八幡宮造営成就不付。兄尊氏の代系
としておもき身分小ありまぐら。塩治が妻かふよ
小向ひて。兜の本阿弥目利くといふを申さるる
彌人俸小似合む。又後醍醐帝よりあらせし義
貞の兜が志色移バどて。其のゆへ人正庫司の女官

うりしかるよとて改^{あら}さるとんかざりたる^{たふけ}癡呆^{ちんけ}あり。
兜^{かぶと}の教^{しやう}ハ四十七あるハ^{ちやうどの}並平^{なひら}筋兜^{すぢかぶと}かぞく多^{おほ}きその
中^{なか}も五枚^{ごまい}兜^{かぶと}の竜頭^{りゆうづつ}とあきべのちど^{ちど}松^{まつ}き物^{もの}を
骨董^{こつどう}舗^やふえでも^{たいせう}大将^{たいせう}の兜^{かぶと}とあきべと物^{もの}なり。
陣^{じん}あ^らの^ら策^{さく}奢^{しゃ}待^{たい}の名^な香^{かう}か^かゆるゆ^ゆ多^たか^かゆるも小^こ鼻^な
と^とい^いく^くして^{して}。天^{てん}仙^{せん}蓼^{りょう}と^と林^{りん}火^かき^きる^る猫^{ねこ}の^の松^{まつ}ふ^ふあ^あん^んく
り^りん^んて^て嗅^か中^{ちゆう}ら^られ^れば^ば。中^{ちゆう}ん^んや^やと^とり^りん^んべ^べさ^さる^る柄^{へい}あ^あも^もあ^あら^らむ^む。
名^な香^{かう}薫^{くわん}る^る竜^{りゆう}頭^{づつ}の^の兜^{かぶと}蠶^{さく}子^しあ^あも^もま^まと^とあ^あら^らむ^むべ^べさ^さら^らぬ

直^{ちやく}義^ぎの^の不^ふ鑒^{かん}定^{てい}馬^ば鹿^か律^{りつ}義^ぎと^とや^やり^りん^ん笑^{せう}ふ^ふ小^{せう}絶^{ぜつ}たり

○高^{かう}武^ぶ藏^{ざう}守^{しゅ}師^し直^{ちやく}

師^し直^{ちやく}ハ^ハ鎌^{かま}倉^{くら}の^の執^{しやく}事^じ職^{しやく}足^{そく}利^り直^{ちやく}義^ぎ社^{しゃ}参^{さん}小^{せう}就^{じゆ}る^る
す^す一^{いつ}の^の大^{だい}役^{やく}陣^{じん}更^{せい}勅^{しやく}使^し馳^ち走^{そう}の^の大^{だい}小^{せう}君^{くん}と^と指^{さし}揮^かして^{して}
例^{れい}式^{しき}作^{さく}法^{ぽう}と^と教^{きやう}授^{じゆ}と^と博^{はく}達^{たつ}聰^{そう}明^{めい}の^の士^しふ^ふあ^あら^らむ^むど^どん^んば
け^け役^{やく}勤^{きん}工^{こう}と^とあ^あら^らむ^む小^{せう}塩^{しん}冶^や判^{はん}官^{くわん}等^{とう}。け^けと^とび
馳^ち走^{そう}の^の役^{やく}義^ぎと^と蒙^{もう}り^り。方^{かた}支^し師^し直^{ちやく}が^がい^いき^きま^まへ^へ一^{いつ}ふ^ふあ^あら^らむ^む
か^から^ら。時^じ宜^ぎの^の指^{さし}圖^ずと^とり^りけ^け。陣^{じん}あ^あら^らぬ^ぬ礼^{れい}法^{ぽう}古^こ実^{じつ}の^の師^し範^{はん}

るれば。備ふあてもあらず。阿ふあてもあらず。身分相
應の謝儀禮物のあはれなき筈あるふ。これを以て何の
會款もあはれなきを。割入館のあはれ女房のうりの
文箱をきづらうとす。師直は恥辱をあはれんとする
仕方。言は道断不出来の至りあり。さらぬ茶と飲
でえおの謝礼をとるゝ世上の習俗すといふ名
判官等。師直をうりせむ坐頭の杖と失ひ舟師の
篙と流し。うらぐて。後義の勤しぬの目あはれ

等が吝嗇うら起るといひなぐ。師直の立腹
あり。若狭之助の本藏が争ひあて。師直が
執成も能く後筋首尾よくはとあり。君への忠
義身の面目もとくさうらぬを柄とりとべ。世人
只師直を後筋一途おあてが。も謹まじ。
只判官が妻あはれ小意慕の支師直が不測法也
保文哥あはれ。往來をうりあて。駭と密通。する小
もあはれと。さすまで答るあはれ。このあはれ。或人

の曰師いひを不まどる侍まへが判ま友り小切きりかけらきて抜ぬ合せあせも
せきと途ち險けんるら比ひ真まの至いたりとり入いるべき歎なげ予よが曰い不ふ然ぜん
これハ直ち義ぎ社しゃ系けいの本ほん陳ちん孫そん小勅せう使し餐あん急きゅうの時とき良よし
まのれバ場所ばあしと憚おそり抜ぬ合せあざる也なりかゝる急きゅう場ば小堂せう
ても君きみ臣しんの義ぎと守まもり進しん退たい礼らいとちるすの士しとり入い
べしとるやど不判ふはん友り小切きり後ご竹たけ付づられられども師しを
めいめいささるるの申まを言こともも一ひと是これおあて考かんあるるべき也なり
又また曰い扶たす之の助すけ小出せうしゅ令し入いて兩りやう刀たうと投な出だし身みと避ひて

作つくらりしし輕かろ為な表あ裏うらの士しららむむと予よが曰いたた不ふああらら
むと幸さい蔭いんが音ね物ぶつと交まててりり忽い率そつ不ふああ日にちのこ言ことが
まの毒どくふふなりししのころろ廣ひろ直ちるるかゆ急きゅう也なり譬たと言ことは
吉きち公こうと亀かめと小兒せうに淨じやう論ろんととるる時とき龜かめ公こう不ふ對たいて
吉きち么ま惡あく態たいととりりてて義ぎ絶たつふふと其その時とき龜かめ公こうのこももええ
飴あめ棒ぼうととりりてて言こと公こう不ふ呈ていさされれババ忽い寬かん尔にととるる
て和わ睦ぼく以い前ぜん不ふ倍ばいささるるガガ如ごとくく師し直ち初しゅ辰しんの失しつ言ごん
ハ不ふ出しゅ来らいととりりどもども誤あやままりり誤あやままりり不ふ憚おそるるととるる也なりと

あれはさの〜むべきにあ〜と

○鹽治判官高貞

大切たいせつの役やくを蒙かうりてまがら。師しを義ぎ狭せう之助しゆすけよりも
まろく不ふ遅おそく登城とんじやうするのゆゑもぞや。殊ことに力ちから弥やと
使者しやと〜桃井うづのゐが館くわんへを〜刻限くわげん正七せいしちの時ときと
中ちゆう合がひせるまがら。遅滞ちざいせしめ役目やくめおろそかとやいけん
甚たゞ不出で来きまらるる寐間ねまの自鳴鐘とけいもあつてなれば
ハツ時ときより起おき出でて支度しどして待まちべきに左ひだりのうて

づんくと遅おそりしに。師直しちゆうが云いふ遠とほいむ。かちよが顔うら

むくりまがめて。内うち不ふむくりへをりけりてござるゆゑに。

加之たし差別さべつもあるべきに。文策ぶんさくをとる出で。是こゝの奥おく

かちよ方かたよりまありしとどりの大おほたけ。是こゝは皆みなかくア

自慢まんより引出ひきだする失あやまちあり。竟つひに短たん急きゆうの一刀いっとう

とぬいて真額まがくへ切きつゝ。是こゝをまりて紐法けんぽう不ふ暗くらし

急場きゆうばうおてん心こゝろせくゆゑ。切きかゝる取とりの必かならずむと難がたて

難がたむとする。對手たいてうを仕留しりぞむるもの也。判友はんともけとら

師直不飛とびかき。只ただ一刀いちぼ不指さし貫くわんさふ。ちやちや不ふのりのりた
尚なほと一いっ端たん取と迹せきたとも。師し壺うが命いのちのあや澄せい助すけるべから
む。是こゝ不ふ皆みな若わか少すく未ま熟じやくの誤あやまりなり。叔しやく又また上かみ使つかひ扱あつ待まち
あまの極きやくまるまる法ほふ式しきあり。判はん官くわん其その礼らいをまととど。上かみ使つかひ
書しよ院いんへ通とほ令れい坐ざ不ふ着つくく着つぬぬちち不ふかか盃さいの
用い意いでよるるどどほほききぬぬるるなり。むむ親おや後ごるるなり
ののややるる若わか不ふへ。上かみ使つかひへま食ま想かうあるるなり。是こゝ又また礼らい式しき
るるなり。けけ後ご進しんもも上かみ使つかひののあありりてて盃さいるるどどやや付つくく

不ふ礼らいるるなり。兼かみてて務むまま不ふ利り意いあるるききるるなり。孫そん又また
今日けふの上かみ使つかひへ切き後ごの檢けん使つかひと。かかみみてて賞かう惜じやくるる
ババ狂きやうささるるののことこと。其その上かみ使つかひののあありりてて弔ちゆうをを解と解と
衣い後ごをを脱だつるることこととと失しつ礼らい之の切き後ごの期き不ふ
臨りん之の由よし良ら之の助すけへまどどくくとと交まくくののよよききひ
と未ま練れん千せん万まん灸まきすす急きやくままぐぐらら乳う母ぼととたたぐぐぬぬるる
小せう児この心こゝろ不ふ等とうししくく武ぶ士しの恥ちづづきき不ふあり。
此こゝ餘よの師し直ちやくが條ぢょう下げ不ふ記きととままば再あ再あびびこれを

倫ぜども。寔まこと不しよ酒まじ狂きやうう血ち迷まよ入いらるら不しよお遠とほいなる

○桃井若狭之助安近

館たねあて師し直ちか不しよ耻ちぢしりらるら殘ざん念ねん一心いっしん不しよ凝こり
已ま不しよ討うち果くわささぐら不しよ存ぞんをきらめ家うち老らう加か古こ
川がわ本ほん藏ざう不しよ輕かううらざる誓ちか言げんを立たさせ意い趣しゆ
とあり。且かつ又また本ほん藏ざう不しよ勵れきさせしらるら是ぜ不しよ
もせよ非ひあもせよ。思おもひ込こめ一念いっしんを仕し通とほま

武ぶ士しの意い氣き路ぢそまご瓦がわ落らく離りとよま遠とほしらて
かまり痴ちぢぢ不しよ負おんせせむ。移うつるら合あせせ刀やのな
あま面めん目めを失うははい。屈くるら人ひとゆり幸あゆ不しよ海うみと云い
沢さわささぶぶままや。家け来らいとらいいままぐぐ武ぶ士し不しよ誓ちか言げん言げん
ままで立たさせてて拵しなりり袖そでがけけややるる西さい遊ゆう女にょ童どう
の遊あそびびままるるややるる毒どく千せん万まん扱あ又また本ほん幸あゆ不しよ
むむららてての物もの詰ぢりりとといいふふ三さん度どままででりりふふ
チちトと鼻はな毛げららしし。其その一いつ不しよ日ひ比ひ某たれを短たんくくとと

契あひを初はつめき方かたが異い見けん其その二ふたつふハ。無む念ねんかき
ある武士ぶしの性根しやうこん家の形かた絶た契あひが歎なげ思おもひぬを
ひまされどもとふ何なにまぞや。家の形かた絶た契あひが
歎なげむううを思おもひ申まをす。本ほん義ぎ初はつめ大おほ終しま屋やの
折せ助すけ不ふ至しるまで一家中いつかちゆうの歎なげを想像さうぞうする
情なさけなき主人しゆじんあり。又また刀たの役目やくめ弓ゆみ矢や神かみへの
恐おそ色いろとりど。遺い趣そ斬ざんふ命いのちをちこそせと弓矢
非ひハり申まをす。又また戦場せんばうあて歩あ死しせむとも師

直一人討うてさる事こと天下てんかの爲ためなと口くちがこ
りども。太平記たいへいきと云いふ。並なら美みさへも兄あはる氏うぢ小
又また向むかふて合戦あつせんかむ時ときたれ世よあられば。昨きのう並なら一人
討うりとも天下てんかの爲ためとりふあどのるゆあもあ
む。其その三さんつふ。契あひもあふてよそまがうのいふ
ごいといどりやう未練みれんが残のこりさうふ思おもひぬを
志こころし若狭わがく助すけ年とし若わがのこさるればあげて論ろん
むらふちうむ。

○大星由良之助義金

其主判官没して後忠士を集め。且夕仇を
報ひんぞ公議也。山科不整居して竊小
鋭氣をまひ。時節を伺ひ終不敵師直と
討取事。如何あも唐土の豫讓あも耻べら
む。然るもども治世の良臣と云べらむ。か
どふ忠義を尽くとの公あらば。かやう不敵討
らむとらふやうな獨の出もぬやう不愚て斗ふ

づまを養う。身の家老の職か。一國一城の権柄を
握る由良之助。かちどの大事出来さるまで
安閑とて國小居るはゆきや。是を主人
判友頼義故のさすおとのへらむに。さほど頼義
うる性候とよくなト居らば。ゆめあはさるる助
早速頼義の孫頼義とあひ中さぶるや
多人の徳中せし公家志の徳さる例古今少く
む。頼義とりふも本病疾ゆして平生の安閑の

云々。是其五。其討の時、小兩戸をさうも中を
之助が工夫所となせりて、鎧を張鴨居境で
備えらる。障子のさうもをさうも。と中をさうも
が、他、佐居の鴨居、竹の力あてもたへむ
べりとも。師直の大名も、六屋、後も、堅固不
建、中も、丈夫なるべし。中く竹の力を借て
兩戸をさうもをさうも。是中、六。中をさうも
助、天河屋、義平、不謂て曰、七君御存生の時

さうも、一方の鎧大将、一國の政道と、いあけ
中、ことと、惜、うぬ、器量と。た、秘、小、あ、判
友、存、命、の、善、吹、拳、し、一、國、の、政、道、へ、預、む
とも。河、ゆ、名、武、士、少、の、取、ま、金、さ、る、や。賢、を、知、て
拳、さ、ら、の、不、忠、の、至、り、と。今、始、て、義、平、が、賢、な
る、紙、探、知、る、小、あ、く、む。其、證、據、へ、泥、中、の、蓮
油、中、の、金、し、の、貴、公、の、夏、左、も、あ、く、ん、さ、も
さ、う、む、と。見、込、んで、頼、ん、ど、一、大、事、に、中、を、さ、う、も、助

いさざんいさざら疑ハヤさぬとらり。是從來
義平が公後を継ぎてゐる由あるなり。是れは
何ぞ。け後の一大事と云うくとおぼむべきや。
まうぐん別主人存生まうぐん一方の總大將。
一國の政道を執るのとは。誠ふ九をまが所謂
ぬらりまらりまの正月個ふして。一時義平おれ
務るの虚候あり。是婦女の心ありて武士の
取ざるふさり。是其七。中長之助の判友の家を

義平の判友へ出への町人格式と云うと編する
時。玉と炭圍むどちがよみ多。まお何ぞや
中長之助長持より出るがらや。義平お
向いぬと流るぬく。入るぬか庭など
甚お遠の礼をく。浪人しるゆゑ身と卑
下まるといふ謂あり。まお亡君の仇と
報せん。且文をよつて。中長之助。浪人
しても家老あり。出への町へ對しては万端

洞付丁寧する所あり。是主人よりある所
のたもき敵分を酒しむるふ似たり。是其八
捕人せりて義平を囲ひ。公座を試る事。
是もそのどきさるりあり。結とも。今夜漁
倉人出立する期ふ飾んで。公座を試さして
何の蓋りありん。たれど疑し。くあり。今初
何るもねあふ。後不効舎の
異心あり。く何とするぞ。あ後不効舎の

仕方。是其九。敵跡を討て。牌前ふて焼香
の。才一をんふ十を帯へ。右の斗ひあることども。
才二番ふ勘平ふ焼香する。へ道理あり。勘
平へ主人へ討し。不忠甚しき大だりけ。新へ
舅中を以て他ふかけ。敵討の場ふも出む
犬死し。る者あり。先才一義士の連判ふかる
べき人柄ふあり。赤心の忠士。救人を
是誠。二番ふ焼香する。きりり。是其

十也。飯よへこぐく言いおはさぎぞ。あがくくくらふ
畧りやくも。ある人の曰い。七段目しちだんめおらふが刀やまを志しらうと
指さへ夫やうと幼平おとせ連判れんぱんゆらうとくく敵たて一
人ひともうちとくも。未来みらいで主君しゅくんお言い次つぎある
中なか。其言そのいひ次つぎはらうやらうと。ぐ川がわと雲くも逆さかむ
雲くもの透する。下しためら九くちま肩かた先さきぬり七しち轉てん
八はち倒たふけふるすひらうおも不思議ふしぎ也。扇紙あふみ一枚まいの
下したへ蚤ひらが一ひとつ足あし飛とんでさへすんざうそんざうとあり

つ。ようらふらうらぬりのを。中なか良よ之の助すけらうら
術まじを突きらるわ。撮との下したお居ゐる九くちまを雲くもの
透す洞まよりさうとあせし。見み突つの鯨くじら。富とみの
札しるしをつくも。飯よ祓はらひ守まもる業わざなり紙し。ん
らかりほけし。はきういりの。万よろ一いつ九くちまが
看みらぬ付つハ。おらるがを指さへて。雲くもの
ハ。こりや愛あいあといひながら。危あや敷し中なかを探たずり
見みら。雲くもも根ね板いたも疵きずだらけし。甚た平へい

ふりひさしあはる望良之ゆ。其云ははのりや。爰
ふらふるべしと云ふ。け況玉極尤也。

○芥九太夫

九さまの徳物と未萌お察と。先見おきくさる
人とりあへざる。ゆちあつが曰。たへ開くおまれば
御門もあしき。開門もぬ赦さる。吉事の
以。越向とりて。九さまの志うらむ。け度殿の
越度。罪重うて切殺とりて。果

て判友切後なり。扱又我子定九郎が平生の行
義と見て。行末をたふして。勅尚せり。果して定九郎
盗賊辻切とほし。終ふ人あふかる。是先見んえすく
秘おぬ。りなうらむ。んば。何ぞひとりの子を勅尚せんや。
只惜らう。國家の苗害と未萌お察せざる。子歟。

○加古川本藏行國

若狭之助が若氣の短意を諒めむ。却て悪行を
励し。勧め裏より。以て師直へ賄賂の進物。け計極て

拙し。是亦戎表裏の侍といふならし。然るも是
言之助也。比もこれに本義を優とよ。拙き計と
いへども。主人の意なく。役を勤むるに。財
を功と云べし。虚無僧も爲て。京へ上り。聲
力強が手おそろて。娘の縁後を極る事。子小迷ふ
親心といへども。まぢらと仕始もあり。さうまの
委し。九段目と考ふべし。

忠臣藏偏癡氣論上終

